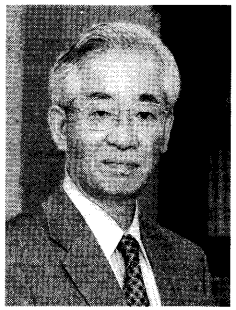
授業を公開することの意味
～鹿児島国際大学における実験から～



瀬地山　敏
（鹿児島国際大学学長）

一　はじめに～「実施まで請け負う」諮問委員会～

鹿児島国際大学ではこの四月から、ボランティアの教員による公開授業を実験的に始めた。この実験を「パイロット授業」と呼んでいる。実験の背後にある理念あるいはこの実験で確かめたいことについては、あとで述べるとして、実験を管掌している大学改革検討委員会について触れておきたい。

学長の諮問にこたえる委員会に大学改革検討委員会がある。この委員会は通常の諮問委員会がそうであるように、諮問事項にたいする答えをプランにまとめて仕事が終わるという形で、運営されてきた。プランを実施するには当然、そのための実施委員会が必要になる。このような時間のかかる作業の進行を避け、また作業の精度をあげるために、大学改革検討委員会を「実施までを担う諮問委員会」に変えた。パイロット授業はふたりの委員がプロジェクト・リーダーになり、検討委員会の討議をへながら、次のように、現在実施中である。

パイロット授業にボランティアとして参加した教員は二二名。授業はもちろん公開で全学の教員が参観できる（参観を勧めるための工夫も行われた）。授業ごとに、自分の授業で努力・工夫した点にたいする出席学生の「評価」を（一律の形式によらず）個別的にアンケートする。授業後の適当な機会に、教員と参観者が集まる「意見交換会」を開き、相互に授業のありかたを検討する。この意見交換会は前期三回開かれ、すべての公開授業について、意見の交換を行った。また夏休み前には、九〇日間の実験を中間評価するために「第一回ＦＤパイロット授業全学シンポジウム」が開かれた。教員と学生あわせて三六〇名の参加があった。このような組織化は、すべてプロジェクト・リーダーが統括している（ちなみに鹿児島国際大学は一昨年創立七〇周年を迎え、経済学部、福祉社会学部、国際文化学部とそれぞれの大学院研究科および短期大学部をおき、学生五、〇六七名、教員数一五五名の地域に密着・親しまれてきた大学である）。

二　成熟化社会とＦＤのありかた

一九八〇年代、大学の大衆化が指摘されるようになったが、この大衆化は成熟化社会のひとつの特徴である少子化が進行するにつれ、さらに深化していると考えられる。大衆化につれて拡張した大学の学生定員と進行した少子化のために、限界に近づきつつある大学進学率の上昇があっても、マクロ的には志願者全員が入学できるという事態が確実に予想されている。この傾向は、個別の大学における経営問題をこえて、深刻な問題を大学に提起している。

深刻な問題とは何か。「勉強に向いている・向いていない」という性向の比率が短期的には変わらないとすれば、マクロ的な全員入学は、現在大学は「勉強に向いていない」学生も受け入れていることを意味する。大学および教員はこの問題の深刻さをじゅうぶんに理解しているとは思えない。誤解のないようにつけくわえれば、「勉強に向いていない学生」をしりぞけようという考えを主張しているのではない。成熟化社会の現実として、この事実を直視して、大学はなにをなすべきかが問われている、とわたくしたちは認識しなければならない。

ＦＤ（教授能力の開発）は多くの大学で、学生による授業評価という形で行われている。それにより授業の改善がいくらか見られるかもしれないが、この形のＦＤはいわば「受動的」であり、先に指摘した問題を解決するには不十分である。

三　ＦＤにおける how と what

学生による授業評価、講義におけるパワーポイント、ハンドアウトの活用などＦＤは、教育の手段（how）としていままで研究されてきた。しかし、なにを（what）を教えるかという側面は注目されてこなかった。「勉強に向かない学生」の割合が、先に述べたように、増えているとき、このwhatの要因はもっと重要視すべきである。

自分の経験を振り返ってもそうだが、教員には研究者として育ってきた者としての経路依存性がみられる。学生のころ教わった内容やその水準が、多かれ少なかれ、学生に教えるときの「標準」になっていると考えてよい。そのために講義でなにを教えるかは自明のことであり、聴講する学生がそれを理解するように、工夫すればよいというhowに傾斜する。しかし「第一回ＦＤパイロット授業全学シンポジウム」おけるある学生の発言は、whatの重要性を言い当てている。「出席率や遅刻にうるさい授業があるが、面白い授業には欠席も遅刻もしない。そのことに気付いてほしい」

ところで講義でなにを教えるかという問題は、たちどまって考えると、howの問題よりかなりの準備が必要である。学生の関心を醸成しながら、なお科目としてのentityを設計しなければならないからである。またそのためには高い水準の研究能力がなければならない。教えるべき項目としてなにを選ぶのがいいか、どのような導入をすればよいか、という問題を解かねばならないからである。いい教師はかならずしもいい研究者ではないといわれる。またいい研究者はかならずしもいい教師ではないともいわれる。そして後者は研究より教育を軽く観る態度の言い訳にも使われる。しかしwhatの重要性を考えれば、いい教育を行うにはいい研究者でなければならない。これは成熟化社会における大学教員が直面する課題あるいは責務である。日本古典文学を講義するある教員が、クラスの平均より下位の学生に焦点をおき、平家物語を説くという授業を参観した。なにを教えるかという戦略が十分設計されていて、それにふさわしく、パワーポイントではなく、ラミネートシートを駆使して、学生の関心をひきつけるのに成功していた。whatを浸透させるのにふさわしいhow―ひとつの典型を観ることができたとおもう。

四　なぜ授業は公開されるべきか

ＦＤのなかで、授業公開を全学的規模で行っている大学はないといってもよい。パイロット授業は全学的に授業を公開することで、教授能力を開発できるかを知るための実験である。もっと正確にいえば、教授能力の真の開発には、学生評価やＩＴ機器の利用ではなく、授業の公開が基本的であるという仮説を検証するという意図があった。研究者は論文を公表し、学会で発表するという形で、自分の研究を公開し、他の研究者の評価を受けながら、研究能力をたかめる。それと同じように教授能力も授業公開により相互啓発を受け、たかくなるはずだと考えたからである。

実験は前期九〇日を経過し、三回の「意見交換会」と一回の全学シンポジウムを行ったに過ぎないが、検定はあきらかに有意である。「意見交換会」では講義した教員と参観した教員の相互啓発がありありとみえた。またこのことは教員・学生三六〇名が参加した、全学シンポジウムでも確かめることができた。ある学生は「パイロット授業に参加して、これからの授業改善に役立つと思うか」と問うた。パネリストになった六名の教員の応答はいずれもＹＥＳだった。しかもこのときのアンケート回答をみると、出席学生全員がパイロット授業は継続すべきであるという意見だった。

五　おわりに～学生評価の形式について～

実験でわかったことのもうひとつに、学生評価の形式がある。通常評価の形式は全学的に統一され、しかも数値化された指標を用いる。パイロット授業では、教員が講義のねらい、それを理解させるために工夫した点を学生に伝え、それにたいする学生の評価を問うという「個別的」な方法をとった。この方が教授能力の開発により直接的な貢献をすると考えたからである。この「個別的」な学生評価の形式をもっと充実させるのが、残された研究課題である。